2011年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，電算処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（45点）

人間が豊かであるというのは、一体どういうことなのか。これについての積極的説明が必要である。

「人間が豊かな」社会とは、要するに「みんながのんびり、ゆっくり生きる」社会ということに尽きるのか？　もしそうなら、「旧ソ連」型社会主義社会、しかもペレストロイカ以前のそれが、今の日本よりもずっと「人間が豊かな」社会だ（だった）ということにならないか？

この疑問に対する我々の答えは、明確な「ノー」である。「のんびり、ゆっくり」人生を楽しむゆとりをもつことは、自堕落にならないけじめを伴うかぎり、もちろん、《人間の豊かさ》の一部をなすが、我々のいう《人間の豊かさ》とはそれに尽きるものではない。この点を明らかにし、求められている積極的説明に踏み込むために、《人間が豊かな社会》における「競争」の意味について、ここで考えてみよう。

競争は、この私たちの社会の否定的側面を論じる際、しばしば元凶としてやり玉にあがる。それは、この社会から人間らしさを奪い、過労と余裕のなさだけをもたらす、とされがちである。

しかし、我々はそうは思わない。競争は、人間の豊かさにとっても――そしてもちろんモノの豊かさを生み出すためにも――必要である。

問題は、競争のありかた、その質なのだ。

私たちが馴らされてきたのは、その都度与えられた同じ目標や範型に向かって、「右に倣え」、「遅れをとるな」、「追いつき追い越せ」とガンバリ、一億総何々式に動員される競争である。

このような競争をエミュレーション（emulation）と呼ぶことにしよう。これは「模倣する、まねる」という意味の語からきている言葉である。

エミュレーションが支配する社会は、与えられた目標達成のための、人的資源の極めて効率的な活用をもたらす。しかし、そ

の一方で、資源として活用される人間は、金太郎飴的なステレオタイプへと規格化され、貧困化されてしまう。

ここでは、人間のもつ個性や多様性をおもてに出すことは、「時流にはむかう」とか「みんなのノッテル気分に水をさす」とかいった理由で、好まれない。そういったものは日陰に押しやられる。

我々は、エミュレーションとしての競争にかえて、言葉本来の意味での競争、すなわちコンペティション（competition）としての競争を、提言したい。この意味での競争こそ「人間の豊かさ」をもたらすものである。

これは、与えられた目標や範型の達成を競うのではなく、目標や範型そのものを、人々が「共に探し求める」営みである。

目標が所与のものではない以上、模範は存在せず、目標そのものを、それぞれが開発し、提案しあわなければならない。そして、どのような人のどのような提案も、それがいかに奇妙に見えようとも、一個の提案として、尊重される。

目標そのものをめぐって、人々が自律的に探求し、共同実験し、相互に論争する不断の実践。そこでは、人間的な生の多様な可能性が、多様な仕方で模索され、試され、修正され、開花し、分裂ゾウショク(1)する。

コンペティションとは、「相手を負かすことによってしか勝てないゼロ・サム・ゲーム」だと、しばしば主張されるが、これは誤解である。勝敗を一義的に決定するようなルールは、単一の目標の達成を競うエミュレーションにはあっても、目標自体が多元化されているコンペティションにはない。むしろ、勝敗の意味そのものをめぐって、多様な解釈が競合するのがコンペティションなのである。

(2)支配的目標とは異質な目標を追求する人々が、「敗者」の烙印をはねのけ、支配的目標に捧げられた人生の貧しさを訴える。他方、「勝者」のつもりでいる人々も、「敗者」とみなされた人々の生き方に接して、自分たちが失ったものを再発見し、人生の意味と目的について新しい角度から考え直す。「よき人生」についての多様な解釈、多様な実践が競合することにより、人々が相互(3)ケイハツし、自分たちの人生を豊饒化する。このような「共勝ゲーム（win-win game）」こそ、コンペティションの真髄である。

例えば、長期休暇、登校拒否、子連れ出勤などは、所与の同一目標の達成を競うエミュレーションにおいては、出世競争や進学レースからの「落ちこぼれ」、職業人に許されざる「甘え」としてだけ見られることになる。

これに対して、目標そのものを提案し競いあうコンペティションにおいては、これらの現象は、より豊かな人生のための新しい戦略や対抗観点、それらを運動化するような対抗実践が育まれる好機として受けとめられる。

私たちの社会の問題は、競争が過剰なことでも、過少なことでもない。そうではなくて、競争の質が貧しいのである。エミュレーションとしての競争が、コンペティションとしての競争を抑圧し、社会の中心から排除していく構造ができてしまっているのである。

コンペティションとしての競争が活発に行われ、あらゆる人の個性的な努力、好奇心に満ちた探求、創造的な提案、勇気ある試行錯誤が、相互に承認され、励まし合われるならば、日本社会は現在のディレンマ状況を脱し、《人間を豊かにする》システムが、拡大ジュンカン(4)的に開花していくだろう。

こうしたコンペティションの実践を活性化させるための重要な条件は、異質な他者への [(5)] である。そしてこの [(5)] こそ、私たち日本社会が最も苦手とする理念なのである。

このことは、私たちの社会が、依然、基本的には「同質社会（a homogeneous society）」であることを意味している。ここでいう「同質社会」とは、関心・発想・感情・共感のパターンなどにおける人々の同質性が（実在しないのに）実在するかのようにみなされ、この擬制が、異質な人々や行動様式を現実に排除する力をもつことにより、社会統合が維持されているような社会のことである。

確かに、最近は「個性化」・「多様化」という言葉が、あちらこちらでしきりに使われるようになった。しかし、「何々化」という表現が好まれるという事実自体、みんながイッセイ(6)に同じ方向、同じ目標に向かって走り出すという、エミュレーションの支配を物語っているのである。

こういう「流れ」や「トレンド」、「時代の趨勢（すうせい）」といったものにむやみに迎合しない [(7)]、つまり、本当の個性を備え

た諸個人は、集団の一体性を損なう、ガン細胞のような異分子として、排除されがちなのである。

このような同質社会の構造は、《人間が豊かな社会》へと日本が転換していく時の障害になるのはもちろん、ヒトの移動の国際化によって「単一民族国家」の神話と現実とのギャップが深まらざるを得なくなると、不安やパニックによる制御不可能な反動を生み出しかねない。

特にまた、現在のような、世界が揺れ動き先が見えない時、「いったい日本はどうなるのだろう」という不安を、私たちは感じざるを得ない。このような時、「荒波に立ち向かう日本丸」というイメージを、人々は抵抗なく受け入れかねない。しかし、[8]このイメージ自体が、旧来の「同質社会」の発想を体現し、強化するものなのである。

「荒波に立ち向かう日本丸」という発想は、「日本が、外の世界と交流する意味があるのは、特異な運命共同体としての日本丸の一体性と存続を保持できる限りにおいてだ」という考え方である。

これは、はるかにソフトタッチであるとはいえ、「まず内をかためて外の難局に対処すべし」という、戦前の日本の発想に似ている。

それに代わる将来の開かれた日本のイメージや理念を私たちが描くことができない限り、すぐにこうした閉鎖的な日本丸の発想に引き戻されてしまうだろう。

その場合、私たちがすべきことは、同質社会の内部基準を手つかずにしたまま、それとは別個の国際交流の基準をつくり、「内むけの論理」と「外むけの論理」を使い分けることではない。必要なのは、むしろ、世界との交流の原理と直結した日本社会内部の編成理念を、発見することである。

我々の考えでは、それは《共生》という理念である。

最近、この「共生」という言葉が、よく使われるようになった。その際、「みんな仲よく生きる」とか、「互いに優しく、気配りしあって生きる」とかが、意味されていることが多い。つまり「調和」ないし「協調」のイメージが、この言葉に重ねられているのである。しかし、我々のいう《共生》は、これとは違う。

「調和」や「協調」のイメージが想定しているのは、いわば「安定した閉鎖系」である。「共生」という言葉が普及した背景には、エコロジー・ブームも与っているが、このことは、安定した閉鎖系のイメージとこの言葉との連想関係を示している。生態学的キンコウ(9)としての「共生」、すなわち、「共棲(symbiosis)」は、例えばスカラベ・サクレ（ふんころがし）と羊の関係のように、閉じた共存共栄のシステムである。

このように、安定した閉鎖系は、タイプの異なる諸要素を含みうるが、それらの諸要素の間には、利害と価値の十分な一致が確立されており、それにより相互理解と期待の相互調整が容易にできる。この安定した内部的キンコウ(9)を維持するためには、真に異質な外部の攪乱要因に対して、この系は閉ざされていなければならない。この系が示す「多様性」は［(10)］なものにすぎず、真に異質なものを排除することによって可能にされている。

これに対して、我々のいう《共生》とは、異質なものに開かれた社会的結合様式である。それは、内輪で仲よく共存共栄することではなく、生の形式を異にする人々が、自由な活動と参加の機会を相互に承認し、相互の関係を積極的に築き上げてゆけるような社会的結合である。

このような開かれた《共生》においては、利害と価値の十分な一致や情感の融合を、ア・プリオリに前提とすることはできない。異質なものに開かれているからこそ、ハーモニーよりは、不協和音の雑然たる喧噪の方が常に大きい。「共生のシンフォニー」などという呑気な言い方を耳にすることもあるが、正しくは「共生のカコフォニー（不協和音）」と言うべきなのである。カコフォニーは、しばしば、鋭い対立のきしみにもなる。

しかし、我々の《共生》理念は、この不協和音やきしみを、社会的病理としてではなく、健康な社会の生理として捉え直す。異質なもの同士の不協和音を響かせる《共生》においては、安定した閉鎖系の調和・協調に代わって、活発な競争が展開されるが、人々の目標体系も異質なものが競合する以上、そこで成立する競争形態の中心は、所与の目標の達成度を競うエミュレーションではなく、目標そのものを多様な仕方で模索するコンペティションである。

《共生》において、人々は異質なものとの出逢いによって、自分の人生をより豊かにする可能性をもつと同時に、異質なもの

への偏見から葛藤を深刻化させ、互いに傷付け合う危険にもさらされている。(11)《共生》とはすぐれて冒険的な企てである。その豊かな可能性は冒険に値すると我々は信じるが、この冒険に乗り出すには、与えられた人生の範型に安住しない自律の気構えと、異質なものとも積極的に関係を取り結びうる寛容の度量という、人間的資質の陶冶が不可欠である。

《共生》とは、押し付けられて受け入れるものではない。私たちが自分たちの人生をもっと豊かにするために、主体的に引き受けるべき冒険なのである。

（井上達夫　名和田是彦　桂木隆夫『共生への冒険』による）

注　ペレストロイカ……ソビエト連邦においてゴルバチョフが行った改革。　金太郎飴……どこで切っても同じ金太郎の顔が出てくるように作った棒状の飴。　共勝ゲーム……参加者双方が共に利益を生み出しうるゲーム。　ア・プリオリ……ここでは「あらかじめ」の意。　陶冶……みがき鍛えること。

〔問一〕　傍線(1)(3)(4)(6)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　空欄(5)(7)(10)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

空欄(5)
A　寛容
B　迎合
C　融合
D　配慮
E　批判

空欄(7)
A　閉鎖性
B　排他性
C　自律性
D　保守性
E　新奇性

空欄(10)
A　偶発的
B　実験的
C　表層的
D　一時的
E　理念的

〔問三〕 傍線(2)「支配的目標」とほぼ同じ意味で使われている七字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問四〕 傍線(8)「このイメージ自体が、旧来の「同質社会」の発想を体現し、強化するものなのである」とあるが、そのように言えるのはなぜか。もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 日本丸というイメージは、集団の一体性が目標達成のためには必要だとし、内部の統制強化を優先した過去の日本と同質の発想を強化するものであるから。

B 日本丸と表現すること自体が、国内の様々な少数民族を統合し、日本を民主的で普遍的な共同体として存続させようとする既存の発想を強化するものであるから。

C 荒波に立ち向かうイメージは、国民が一致団結し、閉鎖的な共存共栄のシステムに対して戦いを挑もうとする従来のエミュレーション的発想を強化するものであるから。

D 日本丸と表現することは、異質な他者が相乗りしていることを認めつつも、相互調整のために、その差異が存在しないかのようにみなす従前の発想を強化するものであるから。

E 日本の外の世界を荒海と表現することで、運命共同体の外に存在する異質な者たちへの不安をあおり、その不安を世界の先行きに対する不安へとすり替えようとする類型的な発想を強化するものであるから。

〔問五〕 傍線(11)「《共生》とはすぐれて冒険的な企てである」とあるが、そのように言えるのはなぜか。もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 人生を楽しむゆとりを追い求めることは、エミュレーション社会では排除されるおそれがあるから。

B 異質なもの同士が競合するのを容認するならば、相互のきしみが決定的衝突へと発展しかねないから。

C 安定した閉鎖系のシステムを、ひとたび外部の異質なものに対して開いてしまうと元には戻れないから。

D 過当競争を生む危険性があるものの、人的資源の有効活用が可能になる点で、エミュレーションより優っているから。

E 異質な者同士が目標達成のため、葛藤を深刻化させると、パニックから制御不能な反動を引き起こす危険性が高いから。

〔問六〕 次の文ア～エのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア さまざまな人々が多様な目標を模索するコンペティションにおいては、奇妙に見える他者の提案をも尊重する精神が必要とされる。

イ 作者の主張する共生とは、相互理解や相互調整が困難な相手とさえ共存し、「みんな仲よく生きる」ことができる社会的結合である。

ウ コンペティション社会では、「勝者」のつもりでいる人々が「敗者」とみなされた人々の人生観を承認することで、自己の人生観をも再考し、人生を豊かにすることができる。

エ モノの豊かさを求める競争が人間の貧しさを生み出してきた以上、もはや画一的に高度消費社会を目指すのではなく、生産のための協力関係を基盤とした共生社会への転換が必要である。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

一九八五年に国際交流基金が一つの写真展を企画・実現し、世界各地でその巡回展を行ったことがある。一九七一年以後十五年間の日本の社会と自然を写した六千点以上の写真の中から、二百点あまりの代表的な映像を選び、これを巡回させた。

この展覧会の準備は二段階にわたってなされた。まず日本写真家協会の代表者たちが、新聞・雑誌その他に発表された過去十五年間の専門家やアマチュア写真家の撮った写真から、長時間かけて約三百点を選び出した。これらをさらに二百点あまりにしぼる段階で、数人の非写真家の審査員が委嘱され、専門家審査員と共に第二次の最終審査をしたのである。私はその段階で審査員の一人に委嘱され、委員会に参加した。

約三百点の写真は当然ヴァラエティに富んでいた。四季の自然は言うまでもない。農村、漁村、大都会の多種類の生活情景もあれば、労働や余暇の情景もある。人々の年齢も、誕生から死まで、各年齢層にまたがっている。流行のファッションの写真もあれば、いずれ劣らぬギンギンの入れ墨の背中を並べてポーズする入れ墨愛好クラブ員たちの風変りな写真もあった。冠婚葬祭、多様な切口でとらえられた一九七〇年代から八〇年代半ばまでの現代日本の社会像がくりひろげられていた。

ところが、それらをずらっと並べた壁面を行きつ戻りつしているうちに、私は興味深い事実に気がついた。つまりそこには、一九七〇年以降の日本社会の像を全世界の前で根本的に決めているはずのもの、すなわち「ハイ・テクノロジー」「情報化社会」「エレクトロニクス社会」といった日本のイメージを端的にとらえている写真が、ほとんどまったくと言っていいほど欠けていたのである。

私は委員の写真家たちにその点について質問してみた。六千余点を三百点にしぼる段階で、その種の写真は意図的に排除されたのか。もしそうなら、現代日本社会を正確に反映した写真展として、ひどく片手落ちになるのではないか。

写真家たちは私に答えて言った。「われわれももちろん(1)その種の写真を含めたかったんですよ。注意して探したんです。しかし、面白い写真が見つからないんです。多くのものは企業の宣伝写真で、この展覧会には不向きでした。さらに重要な理由とし

て考えられるのは、情報文明の高度に発達した分野でいま主役を演じているのは、人間ではないということです。主役はロボットですからね。ロボットの写真を撮ってみても、カタログ写真のようなものにしかならないんですよ。おまけに、写真家がいちばん好奇心を燃やして撮影したいと思うような場所や物は、撮られる企業の方からすれば、最も注意深く秘密を守らねばならない場所や物なんです。撮影は禁じられるわけです。その結果がこれというわけです。」

なるほどその通りだった。日本の情報化社会、ハイテク文明は、写真の被写体としてはまるで面白みのない精密なマシーンによって維持され、繁栄しているのだった。

もちろん、それらを操作しているのは、優秀な頭脳をもった科学者でありエンジニアである。しかしこの人々も、写真に撮って魅力的に写るのは、むしろ仕事から解放されて余暇を楽しんでいるような時だろう。それも本職からはできるだけかけ離れた、意外性に富んだ姿であればあるほどよい。このことは、一般的に言って、現代人の生活にひそむ [(2)] 性をも暗示していよう。

精密機械内部の複雑きわまる機構について知悉(ちしつ)している人は、その特殊な分野においてさえ、ごく少数のエリートだけである。他の大多数は、自分がその内部構造についてはほとんど、あるいはまったく無知であることをはじめから自覚している電子機器の末端装置を操作するだけで、日々の生活を適度に快適に過ごすことができている。その快適感は、実際のところ、私たち自身の個人的な偏向や威厳や独自性を徐々に(3)コンピュータの支配する中央管理的・画一的な社会に譲り渡すことによって、それと引替えに得られたささやかな快適さにほかならないのではなかろうか。

そのため、現代人が存在全体で感じとっている不充足感、欲求不満、漠然とした不安は、解消されることなく、逆に徐々に鬱(うつ)積(せき)してゆくという状態が恒常化してきている。

一真に重大な問題について決定する力と権限を持っているのは、すでに人間ではなく、精密きわまる超能力を備えたロボット群なのではないか——そのような状況が一九七〇年代以降の情報化社会の本質的不安をかもし出している。(4)ここでは、一枚ずつのスチール写真に写る固定した映像は、もはや取返しがつかないほど古典的であり、つまり人間的でしかないのだ。

「見えざる世界」である「情報」は、「対象」として客体化することができず、カメラの目には写らない。情報の本質的属性とは、つまるところ動きそのものにほかならず、時間的過程を常に含んでいるから、固定した映像とはまったく相容れまい。それは、たとえば芸術的な分野に関して言っても、コンピュータ絵画のごときものとして、またプロモーション・ヴィデオのごときものとして、現代の最高技術が到達した名人芸の自己表現というような形で提示されるしかないことになる。一枚で静止・完結している写真ばかり集めたくだんの写真展にその関係の映像がないのは、ごく自然の成行きだったのである。写真は、今では疑いもなく「人間」のイメージに固執することによってしかその存在理由を見出せなくなりつつある分野なのだ。大自然を写した写真も、「人間」が常に背後に存在する。

（大岡信『ひとの最期の言葉』による）

〔問一〕 傍線(1)「その種の写真」とあるが、それを示すものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 農村、漁村、大都会の生活情景を撮った写真
B 一九七〇年代以降の日本を象徴する写真
C 現代日本社会を正確に反映した写真
D 日本の情報化社会を端的にとらえた写真
E 企業の宣伝写真やカタログ写真

〔問二〕 空欄(2)に入れる二字の漢字としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 分裂　B 孤立　C 多面　D 専門　E 閉鎖

〔問三〕 傍線(3)「コンピュータの支配する中央管理的・画一的な社会」として筆者が恐れているのはどんな社会か。次に掲げる文の形で答えるとして、空欄に入れるのにもっとも適当な二十字以内の語句を本文中から探し出して答えなさい。（句読点、かっこも一字と数える）

コンピュータに、［　　］がある社会

〔問四〕 傍線(4)「ここでは、一枚ずつのスチール写真に写る固定した映像は、もはや取返しがつかないほど古典的であり、つまり人間的でしかないのだ」とあるが、これとほぼ同じことを述べた一文を本文中より探し出し、最初の五文字を解答欄に記入しなさい。（句読点、かっこも一字と数える）

〔問五〕 次の文章ア～エのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　情報化社会は人間がつくりだした社会であるにもかかわらず、今やその主役は精密なマシーンであって人間ではない。これは人間が情報化社会から排除されつつあるということを意味する。

イ　情報は、実態としては目に見えないものであり時間的な経過の中に存在するものだが、その一瞬の有り様を切り取る手段として、一枚で静止・完結しているスチール写真は効力を発揮することができる。

ウ　写真というメディアは人間のイメージを表現するのに適しているので、写真展の審査員が人間的な映像だけに魅力を感じ、そうした写真ばかりを選び出したのは当然であるといえる。

エ　たとえ大自然を写した写真であっても、それをよく観察すれば人間の痕跡を発見することは容易である。現代において人間の生活がもたらす影響を被っていない環境などあり得ないからである。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

今は昔、小野宮殿の大饗に、九条殿の御贈物にしたまひたりける女の装束に、そへられたりける紅の打ちたる細長を、(1)心なかりける御前の取りはづして、遣水に落とし入れたりけるを、すなはちとりあげてうちふるひければ、水は(2)ははしりて乾きにけり。そのぬれたりけるかたの袖の、つゆ水にぬれたるともみえで、おなじやうに、打ち目などもありける。むかしは打ちたる物は、かやうに［(3)］ありける。

また、西宮殿の大饗に、小野宮殿を、「尊者におはせよ」とありければ、「年老い、腰いたくて、庭の拝えすまじければ、えまうづまじきを、雨ふらば庭の拝もあるまじければ、(4)まゐりなん。ふらずば、え［(5)］まゐるまじき」と、御返事のありければ、雨ふるべきよし、(6)いみじく祈りたまひけり。その(7)しるしにやありけん、その日になりて、わざとはなくて、空くもりわたりて雨そそぎければ、小野宮殿は、脇よりのぼりておはしけり。中島に、おほきに木高き松一本たてりけり。その松を見と見る人、「藤のかかりたらましかば」とのみ、見つついひければ、この大饗の日は、睦月の事なれども、(8)藤の花いみじくをかしくつくりて、松の木末よりひまなうかけられたるが、(9)時ならぬものはすさまじきに、これは空のくもりて雨のそぼふるに、いみじうめでたう、をかしうみゆ。池のおもてに影のうつりて、風の吹けば、水のうへもひとつになびきたる、まことに藤波といふ事は、これをいふにやあらんとぞみえける。

（『宇治拾遺物語』による）

注　小野宮殿……藤原実頼。　大饗……大臣任官の大宴会。　九条殿……藤原師輔。　細長……袿に似た女性の上着。
西宮殿……源高明。　尊者……大饗で、主賓として上座にすわる客。おもに年長・高位の者があたる。
庭の拝……尊者が中庭まできて、座につく前に主客の間でおこなう応接の礼。

〔問一〕傍線(1)「心なかりける御前」、(2)「はしりて」、(4)「まゐりなん」、(7)「しるし」の各語句の口語訳として、もっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1) 心なかりける御前

A 冷淡な夫人
B 不作法な夫人
C 無謀な主人
D 不注意な従者

(2) はしりて

A 自然に動いて
B どきどきして
C 飛び散って
D さらさら流れて

(4) まゐりなん

A さし上げましょう
B 参拝いたしましょう
C 失礼いたしましょう
D 参上いたしましょう

(7) しるし

A 紋所
B 先触れ
C 結納
D 効験

〔問二〕空欄(3)、(5)には、それぞれ同じ語が入る。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A は　B なむ　C も　D か　E こそ

〔問三〕傍線(6)「いみじく祈りたまひけり」は誰の行為か、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 小野宮殿　B 九条殿　C 西宮殿　D 尊者　E 見と見る人

〔問四〕 傍線(8)「藤の花いみじくをかしくつくりて、松の木末よりひまなうかけられたる」とは、どのようなようすか。その説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 藤の花をとても美しく育て上げて、松の根元からびっしりとまとわりつかせたようす。
B 藤の花をとても美しく育て上げて、松のこずえからすきまもなく下げられたようす。
C 藤の造花をたいそうおもむき深く飾って、松のこずえを隠したようす。
D 藤の造花をとてもたくさん作って、松の木のこずえからすきまもなく散らしたようす。
E 藤の造花をとても美しく作り上げて、松のこずえからすきまもなく飾ったようす。

〔問五〕 傍線(9)「時ならぬものはすきまじきに」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 藤の花が大饗の間に合わないことは、しかたがないので。
B 藤の花が大饗の季節にないということは、さびしいことだが。
C 藤の花が大饗の時期に合わないことは、ものたりないことだが。
D 大饗の間に合わない藤の花は、役にたたないので。
E 大饗の季節に合わない藤の花は、興ざめであるが。